

「解明」と「謎なぞ」：言語の創発を考える

三上 温湯 (Onyu Mikami)

東京都立大学

「解明 (elucidation/ Erläuterung)」は、Wittgenstein の、とりわけ前期の哲学において重要な概念であり、『論理哲学論考』で彼は、哲学の営みそのものが、この「解明」に存していると述べている ([TLP] 4.112)。この解明の概念は Wittgenstein がはじめて見出したものではなく、Frege によって指摘された概念である。彼が見出したのは、大まかにいえば、ある特別な言語使用 — すなわち、論理的カテゴリや、基礎的・原始的な科学的用語¹は、それがあまりに基礎的であるために当該の理論内部で（その理論の言語を用いた）定義ができない場合があり、その様な場面で我々が、比喩的な表現などを用いて、ヒントを与え、聞き手の理解・「歩み寄り」に頼る形で問題となっている概念の共有を確認するような言語使用²である。彼はこれを定義と区別して解明と呼んだ [Frege1906]。すでに James Conant 等により指摘されているように、Wittgenstein はこれを、批判・修正しながら継承していると見られている。Conant をはじめとして、周辺の研究者たちにより、特に『論考』における無意味 (nonsense/ Unsinn) 概念との関係のもとで、解明の内実がどのようなものであるか、『論考』において Wittgenstein が解明という言語活動を引き合いに出した意図がどのようなものであったか等が吟味されてきた。

本研究は、Frege による概念記法の構築と、Wittgenstein によるその継承・批判の系譜、さらにそれらを引き継ぎ、証明論的意味論等に結びつく意味理論 (Theory of Meaning) のプログラムを企てた Michael Dummett の考察から現代に至るまでの論理・意味についての諸考察の視座のもとに、『論理哲学論考』内部の解釈問題としてではなく、言語・論理とその意味についての一般的な問題として「解明」概念を捉え直し、その現代的意義と啓発性を明らかにすることを目指すものである。

本発表では、「解明」が元来、定義あるいは判断から区別される特別な言語使用として見出されているということに焦点を当て、それが我々の言語活動のどのような側面を捉えているか、また、どのような役割を持っているかを検討する。解明的な発話が孕む著しい特性、ないし問題の一つは、そこで導入される基礎的概念の上を動く変項が取りうる値の領域が不確定であり、タイプを跨った使用や、さらには、相異なる言語の併用（融合的適用）が容易に為されるという点である。本発表ではとりわけ、このような言語使用に類するものとして、Cora Diamond が「謎なぞとアンセルムスの謎」[Diamond1991] の中で考察した「謎なぞ(Riddle)」について検討する²。Diamond の指摘するように、

¹ cf. 幾何学における「点」、物理学における「力」、言語学における「形態素」等々

² 実際 Frege は、「幾何学の基礎」[Frege1903]の中で、神の存在証明の受容可能性との比較のもとで、ヒルベルトによる幾何学の公理化の問題点を説明しようとしている。この点については、Diamond の主張を照らし合わせつつ発表内で検討する予定である。

謎などは、そこに含まれる語の意味（とりわけ述語の取りうる値の領域）が未確定であり、その謎などを解くことによってまさに、それを解く方法が作り出され、謎などそのもの眼目が明らかになるようなものである³。謎などを解くことは、一定の記述にあてはまる対象を現実を探すことと区別される一方で、その答えは単に恣意的に与えられた想像上の対象でもなく、何らかの（緩い）意味で根拠づけが為され、正しさ（correctness）を有するようになる。この様な謎などの提示は、肯定的にであれ、否定的にであれ、人々を参与させ、言語ゲームを立ち上げるはたらきをするものであると考えられる。Wittgenstein の言語観についての「謎など」を通じた考察を踏まえ、Wittgenstein が、Frege の指摘した「解明」をどの様に捉え、どの様に展開したかということについて、一定の見通しを与えることを目指す。

このように「謎など」と「解明」という言語使用が為される文脈を看取することによって、確定したタイプを持つ言語的アイテムからなる構文論的構造と、それに対応するモデルが与えられる言語を前提するというヴィジョンから脱し、いわば言語以前の、発話の眼目（point）を捉え、根拠づけ（justification）の活動に参与する人々の行為の可能性がより根本的なものとして理解されるだろう。さらにいえば、そうした我々の行為の可能性に基づいて、言語の論理的構造やその諸部分の意味、真理などの意味論的概念を、分析・再構成することの重要性が明らかになると考えられる。Dummett による正当化に依拠した意味理論は、こうしたアプローチの一つの具体化であると捉えられるし、現在に至って、Jean-Yves Girard をはじめとする研究者たちの試みは、構文論と意味論、真理などの既存の論理・言語的道具立てを前提せずに、我々の行う相互的な作用・ある種の計算から論理を回復しようとするというよりラディカルな企てとして捉えられる。本研究により、こうした試みの歴史的な位置付けが可能になることが見込まれる。

参考文献

- Wittgenstein, L. (1981). "Tractatus Logico-Philosophicus"(TLP), 1922 C. K. Ogden (trans.), London: Routledge & Kegan Paul. Originally published as "Logisch-Philosophische Abhandlung", in *Annalen der Naturphilosophische*, XIV (3/4), 1921.
- Diamond, C. (1991). Riddles and Anselm's Riddle. In C. Diamond, *Realistic Spirit — Wittgenstein, Philosophy, and the Mind*. Massachusetts Institute of Technology.
- Frege, G. (1903). 'Über die Grundlagen der Geometrie', *Jahresbericht der Deutschen Mathematiker-Vereinigung* 12 (1903): 319–324 (Part I), 368–375 (Part II); translated 'On the Foundations of Geometry' (First Series), by E.-H. W. Kluge, in McGuinness (ed.) 1984, pp. 273–284.
- Frege, G. (1906) 'Über die Grundlagen der Geometrie', *Jahresbericht der Deutschen Mathematiker-Vereinigung* 15: 293–309 (Part I), 377–403 (Part II), 423–430 (Part III); translated as 'On the Foundations of Geometry' by E.-H. W. Kluge, in *On the Foundations of Geometry and Formal Theories of Arithmetic*, New Haven: Yale University Press, 1971; reprinted in B. McGuinness (ed.) 1984, 293–340.

³ Diamond が扱う謎などは典型的には、スフィンクスの謎「六本の足と二つの頭と一本の尻尾をもつもの」（馬と騎手）などである。彼女は謎などに答えることと通常の記述にあてはまる対象を探すこととの違いを指摘し、そこでの洞察をもとにアンセルムスの神の存在証明で提起される「それより大きなものを考えられないものは何か」という問いについて考察している。